

明治・大正・昭和初期の ブロンテ姉妹の受容

—東京女子大学図書館所蔵の文献を中心に—

佐久間 千 尋

ブロンテ姉妹の小説が日本に紹介されたのは、1886年『女學雑誌』誌上と言われている（岩上15）。イギリスでは、1847年の出版当時、『ジェイン・エア』の評価が高かったことは広く知られている。1847年12月25日の *The Athenaeum* は、『ジェイン・エア』、『嵐が丘』、『アグネス・ 그레이』を同じ著者によるものと判別し、『嵐が丘』は不愉快な物語だと評している（281）。この後、類似した批評が現れるも、1848年以降次第に『嵐が丘』の評価に変化が生じていくことになった。日本で、およそ40年の時を経てブロンテ姉妹あるいは彼女たちの作品を知り得た人々は、どのように感じていたのだろうか。言語も文化圏も程遠い文壇において、いかに紹介され、評されていたのだろうか。

今回、東京女子大学図書館所蔵の文献をもとに、ブロンテ姉妹の受容の流れを概観し、その傾向を探りたい¹。本稿は、各媒体におけるブロンテ姉妹に関する記事を考察し、その傾向を分析するものである。

1. 明治時代

1886年の『女學雑誌』第32号には、次のような記述がみられる。

……佛蘭に於ては革命ののち英國に於ては千七百九十二年の後ち女權初めて起り女は男と同様に一個の人類なる事を承知さるゝに至れり斯て多少の自由を女に與へたれば爾來一世紀をも経ざるうちにゼーンヲウステン。ブロンテ姉妹。ブローニング夫人。ゼヲダイリヲットの如き女子

をも生じたれ若し之よりして女に投票權の自由を與え女をして更に發達せしむべき方法を供えなば多くも經ざるうちに數多の女秀を得るに至らんは甚だ明白なりとて痛くチャプマン夫人の第二論を破れり (25)²

1792年といえば、メアリ・ウルストンクラフトの『女性の權利の擁護』のことを指していることは明白である。注目すべきは、ウルストンクラフト以降、女性の役割を促進あるいは發達させるのに一役買った女性たちの例として、ブロンテ姉妹があげられている点である。『女學雜誌』は「後進的女性の啓蒙に従事する一方、女性の向上・解放に関心ある進歩的男女を対象に「女学」を論じ、同時に婦人矯風会設立や廢娼運動、一夫一婦制建白運動等に参加協力しつつ、全国各地の動静を連続報道し、いわばわが国初期婦人解放運動の機関紙的役目を果たした」(『復刻日本の雑誌』76)ということから、その理念に沿うかたちでブロンテが紹介されたものと考えられる。ジェイン・オースティンやジョージ・エリオットも併記されており、彼らもまたこれ以降、他の媒体において度々言及される。ウルストンクラフトの理論が明治期の日本の雑誌上に言及されていることは大変興味深い。西洋に比べて日本が未だ保守的であることが示唆されている点も注目に値する。

1888年、『女學雜誌』第108号における「理想之佳人」と題する「社説」に『ジェイン・エア』の名が登場する。「其一、美人必ずしも佳人に非らず」において、次のような記載がある。

佳人よ佳人よ、吾人は之を女性の英雄として、常に崇敬し置かざる者也。されば世の小説家諸君、君等其の理想佳人を画くとき、千篇一律、皆な美人佳人を混同せざるはなし、希はくは少しく之に注意し、先づ此の兩人種の間に、判然たる谷の存することを示せ。ジェーン、アイルの一小説、餘り美しからぬ佳人を以て立物と爲すは、眞に是れ非常の卓見にてある也。故に云く、文明國民が理想とする佳人の第一資格として、先づ佳人必ずしも美なるを要せずと斷定すべし。(2)

『ジェイン・エア』について、さほど美しくはない「佳人」を主人公にしている点を高く評価し、このアイデアは非常に優れていると述べている。この

社説はのちの水谷不倒による『理想佳人』のタイトルに影響を及ぼしたのではないかとも想定される。

1890年『國民之友』第7巻には、興味深い記述がある。第91巻において、「西洋小説百種」のなかにブロンテの名が挙げられているのである。ここでは、「若し西洋小説百種中最も傑作なるもの十種を挙げれば則ち左の十種なるべし」(38)との但し書きの後、ランキングを掲載している。上位10作品は、「(1) Vanity Fair、(2) Les Miserable、(3) A Tale of Two Cities、(4) Middlemarch、(5) Pilgrim's Progress、(6) Don Quixote、(7) The Anti-quary、(8) Monto Cristo、(9) Esmond、(10) Westward Ho!」(38)となっている。したがって、ブロンテはトップ10には入っていない。上位陣のなかにサッカレーが2作品選ばれていることは注目に値する。この後、次の90種はアルファベット順にて列挙され、「(20) Jane Eyne (ゼーン、エイ子) ブロント」(38)との記載がある。第90巻には50種まで掲載されており、そのなかでも特筆すべきは、エリオットとディケンズの選出の多さであろう。両者ともに10位内に選出されており、上位50作品のうち、ディケンズは7作品、エリオットは5作品選ばれている。

1892年、『少年文庫』の「叢談」には、「近代英吉利文學を飾れる二大閨秀あり」(346)として、ひとり詩人のヘマンズ (Felicia Dorothea Hemans)、もうひとり小説のシャーロット・ブロンテであるとしている。今日、日本におけるすぐれた女性作家は多いが、誰がヘマンズやブロンテになるのか、どの前置きの後、ヘマンズに続いて、シャーロットの評伝を掲載している。ここで刮目に値するのは、小説出版に係わる記述であろう。評伝の出だしは次のようである。「シャーロット、ブロンテ女史 (Charlotte Bronté) は實際派の小説家にして、其著はすところの小説ゼーン、エーア (Jane Eyre) は、實に今に至る迄世人の愛讀して止まさるところなり」(347)。ここではエミリヤンの名前にも言及されているものの、作品名には及んでいない。しかしながら、「同年女史の姉妹、エミリー、及びアン又小説を出せり、然れども其聲價遙にシャーロット女史の作に及ばざりき」(348)と、三姉妹を比較

している点で新鮮である。シャーロットの小説の評判がいかに高かったか、また彼女の文才が優れていたかを示した評伝となっている。この評伝は、イギリスでの出版当時の批評を踏襲したものと考えられよう。

『ジェイン・エア』への言及は引き続き登場する。同年、『早稲田文学』の「時文評論」における、「小説に於ける二勢力」は、これまでより『ジェイン・エア』のストーリーに言及している点で斬新である。ただし、当該記事には「フォーラム」における「メレー、カッチングが所論」を抄訳したものであると前置きがある。ゆえに、当該の批評を日本における解釈と受け取ることは難しい。しかし、この抄訳が紹介されたことにより、のちの受容に影響が及ぼされたと推測することはできる。この抄訳では、超自然説を利用した小説家の代表者としてウォルター・スコットとシャーロットを挙げている。特筆すべきは、『ジェイン・エア』における前兆、夢、幻影、トチノキへの落雷等に言及し、ジェインが離れているにも関わらずロチェスターの声を聞いた場面を引き合いに出し、「要するにブロンテは真に超自然の作用を信じたりしならん吾人はスコットの詩歌的想像を美とすると同時にブロンテが想像の強く鋭きを稱せざるを得ず」(2-3)と述べている点である。シャーロットの想像力の強さと鋭さを称賛していることがうかがえる。

シャーロットとスコットを並び称している点は、非常に興味深い。シャーロット自身、スコットの影響を存分に受けていたことが伝記的事実から明白だからである。シャーロットは1834年の手紙の中で「小説はスコットだけを読みなさい。彼以降のすべての小説は価値がない」(Gaskell 140)と書いており、エリザベス・ギaskellによる牧師館の蔵書記録にもスコットの作品が見受けられる。また、ブロンテ姉妹が本を借りていたキースレー職工学校にはスコットのすべての小説がそろっていたことが判明している(Whone 358)。姉妹がスコットの小説に親しんでいたと推測するに足る証拠も示されてきている。ジュリエット・バーカーは『ロブ・ロイ』(1817)と『嵐が丘』との類似点を指摘している(501)。フローレンス・ドライは『黒い小人』(1816)とエミリの小説において、設定、キャラクター、プロットの一致に言及している。殊

に、Earnscliff や Ellieslaw 等、名前の類似性は顕著である (Dry 4)。

このように、スコットとシャーロットの間には明白な影響関係が存在している。そしてその二人を並立して扱っているこの評論は、スコットとシャーロットをロマン主義小説家として一もっとも表現は「超自然説を利用した小説家」であるが一並び比較しただけでなく、双方の文学的技巧を評価している点で大きな意味を持っている。また、ロマン主義が台頭し始めた時期の日本において紹介されているという点も看過できない。

1896 年、『國民之友』第 18 巻第 277 号では、「チャーロット、ブロンテ女史」との項目を設け、伝記を紹介している。この伝記の注目すべきは、これまでの雑誌の記載とは異なり、シャーロットだけでなくエミリアンにも言及している点である。ふたりの名前の紹介は 1892 年『少年文庫』にすでにみられるが、一家の伝記を紹介しているという点において目を引く。伝記は次のように始まる。「現代巾幗文豪の中、最も思藻に富みたる作家として英國文界に其名高きチャーロット、ブロンテ及其妹女エミリーは、ヨークシヤ州一寒村ハウオスに生れき」(23)。同号においては、父親パトリックやブランウェルについても触れられ、ブロンテ姉妹が自由に習作に励んでいたことにも言及し、コルワンプリッジで受けた苦痛をシャーロットが『ジェイン・エア』に遺憾無く語り尽くしたと締めくくっている。

同巻第 278 号では、「シャーロットブロンテ女史」において、シャーロットとエミリーの学校生活から始まり、シャーロットがニコルスと結婚し、九年後に亡くなるまでが記されている。このなかで最も目を引くのが、エミリーに関する記述である。「妹女エミリーもまた、其才情姉に劣らず、其の發達は頗ぶる姉と異なりき」(32)と明確に記し、さらに「其の最傑作、『ウオザーリング、ハイト』の如きは彼をして許多想像派作家の中第一流に位次せしむるまでに成功したるもの」(32)と紹介している。姉妹の他の作品名についての記述はこれまで見受けられなかったため、大変興味深い。さらに、エミリーの愛犬キーパーについても言及している。「彼は亦動物を寵愛する事甚だしく、殊にキーパーと呼ぶ逞ましき老犬の如き、その最も愛するものにて、

『シャーレイ』中の一女丈夫の狂犬に噛まれて、直ちに熱鐵を其傷に加へたる一節の如き、全く事實より得來れるもの」(32)。ここでは、ブロンテ姉妹の小説のほとんどに言及が及んでいる。加えて、エミリとキーパーのエピソードは、限られた伝記的事実として重要であるため、このたびの評伝の価値は高いものであると言っても過言ではない。

1896年、『帝國文學』第2巻第7号「雑録」のなかの「英國小説家の批評比較及び價值(續)」には、『ジェイン・エア』の一節が原文で引用されている。著者はK.K.と記されているが、岩上氏は、同雑誌の編集委員であった畔柳都太郎と思われるとしている(17)。ここでは、シャーロットはジョージ・エリオットに劣らず女性作家として名高いと述べ、詳細な伝記であるギヤスケル夫人の『シャーロット・ブロンテの生涯』(1857)に言及している。

……吾人は凡ての文學史中斯の如き境遇に生熟したる天才が其異常なる想像力を放て未だ經驗せざる生活の光景を描寫して而かも毫も誤らざる本能の驚くべき類例を何處に求むべきかを知らざるなり、ジェーン・アイア(Jane Eyre)の如き獨創の小説出版せられたること甚だ少し、古今の大家は多く其文學上の模範を有せりしかどもチャロット、ブロンテには之れあらざりき、彼女はサッカレエ崇拜者の一人なりしが思想に於ても文牒に於ても渠に負ふところ何程もなし、フィイルディング、スモオレット、スタアン、スコット、デッケンス、是等の孰れに彼女は最も似ざるか、縦しや事實らしき寫實的筆法に於てデフォオを想ひ起さしむるとも、又た縦しや人情の匣を剖き毫を拆く方法に於てリチャードソンを想ひ起さしむるとも、兩者の欠點は彼女一も有せざりき、感情の活寫せられたる、性格の明確なる、筋の巧みに發展する、興味の横溢せるジェーン、イ、アに若くもの太だ稀れなり(86-88)

ここでは、シャーロット・ブロンテを高く評価していることが明らかである。特に強調されているのが、『ジェイン・エア』の獨創性である。感情を生き生きと描く手法、プロットの巧みな展開など、技法に関して賞賛している点は刮目に値する。筆者は続けて、「チャロット、ブロンテに因りて吾

人は始めて現代に入る、 Dickens、サッカレエの世界は既に古びぬ、ジェエン、イ、アの作者の念頭に鑲刻されたる目的と希望とは猶ほ現代の思考家の目的と希望とを構成するものなり、例せば婦人の地位に關する問題の如し」(88)との記述の後、『ジェイン・エア』の一節、“Women are supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel . . . to playing on the piano and embroidering bags.” (125-26) の原文を引用している。1890年の西洋小説百種においてランキング上位だったディケンズやサッカレーのことを思い起こすと、同時代の記事ながら、その評価には多少なりとも差異が生じていたこともうかがえる。

同年、水谷不倒による「理想佳人」が発表された。これは『ジェイン・エア』の抄訳であり、挿絵付きで『文藝俱樂部』第2巻に第8編、11編、12編、14編の計4回にわたって連載されたものである。シャーロットの小伝の後、抄訳を掲載しており、第14編はロチェスターとアデールの会話で終わっている。冒頭に記されている、本タイトルに関する説明は次のようである。

此書原名を『ジェーン、エール』といふ、シャーロット、ブロンテが傑作なり、其『理想の佳人』と題したるは、形も美、心も善なる完全の淑女といふ義にあらず、蓋し編中の副主人公ロチエスタルが所謂理想の佳人、即ち氣質、好尚等の適合する資格の淑女といふに採れり、ロチエスタル曾て歐州大陸を經巡り、理想の佳人 (Ideal lady) を求むること十年一日の如し、然に彼は大陸に得ずして、たまたま我家の内教師に發見す、是ジェーン、エール其人なり、そもそもブロンテは理想派の作家にして、またロチエスタルの意味にて、ジェーン、エールを理想の佳人と認めたること疑なし、故に『ジェーン、エール』の原名を『理想の佳人』とは題したるなり。(142)

ジェインに「佳人」という言葉を当てたことは原書の文脈を考慮したものであると述べている。この理は、1888年『女學雜誌』掲載の「理想之佳人」を彷彿とさせる。

1899年、『世界之日本』における「一葉全集を読む」には、日本の文壇と

関連付ける言及が見て取れる。シャーロットが樋口一葉と並び評されているのである。

……ブロンテが小説家としての特質は、批評家ハットン氏の言ひけむ如く、様に依て胡盧を描く、社會小説家にあらず、文に依て文をやる書齋作家にあらず、彼は其一篇の趣向を結撰せんとするに當て、必ず先づ其物を創思す、如是の性、如是の體、如是の力、如是の作と、而して後、始めて因縁果報、本末究竟を創造し來る、彼の境を主とし事を主とするものと同じからざる也と、是豈小説家たる一葉を解了するに於て端的の秘鑰にあらずや、(14)

著者はこのように述べた後、一葉がブロンテに似ているのはその作品ではなく、一家の生計を支えるという辛酸を舐めた境遇にある、と続け、シャーロットの生涯を簡潔に紹介した後、次のように締めくくる。

遂にジェーン、エアの大作を成して、英國小説壇に、一光彩を添ゆるに至りたるもの、亦實にこの心よりするものにあらざるはなし、……何ぞ其の相似たる事の甚しき『十三夜』『たけくらべ』は、未だエーン、エアと日を同うして語るべからずとするも、尚よくレルレーやヴ井レットに比すべからずや、ブロンテの逝くや、享年四十歳、批評家多く其早逝を痛む、而して一葉女史の逝くや、紀するもの只二十有七 (14)。

具体的な類似点というよりは表面的な言及にとどまっており、また、当該文献が初であったかどうかは定かではないが、相互の文壇を結びつける契機になり得たと考えることができるのではないだろうか。

2. 大正時代

大正時代の文献については、主な2作について言及したい。青山霞邨の『英國の青鞥女ブロンテ女史』と、豊田實による *Wuthering Heights* の注釈版である。1913年に出版された『英國の青鞥女ブロンテ女史』の前書きにおいて、著者は米国を去るとき、日本に口語詩を成立させることと、シャーロット・ブロンテを紹介することの2つの願望を抱き、不十分では

あるが第2の願望を果たすことにした、と記している。そして、題名に冠した「青鞥」の意図について、「青鞥とは、ブルー・ストッキングの譯語ださうな。然らば青鞥の二字は虚榮的衒學的な非家庭的な生意氣女といふ意味に取れる。縱令これを善い意味に取つても、この二字を最も峻嚴な道德觀を把持して居つたブロンテに冠せるのは不當といはねばならぬ」(1)としながらも、「自分が青鞥といふ狗頭を掲げてブロンテを紹介するは時世に對する一大皮肉かも知れない」(3)と説明している。また『ジェイン・エア』の出版について、出版社やサッカレーをはじめとして大變評判は高かったものの、道德觀を批評したジョージ・エリオットとエマーソンについて言及している。特に前者については、エリオットが『ジェイン・エア』を奴隸的道德と嘲ったことを指摘し、それというのも、エリオットが後に妻と離婚できなかったジョージ・ヘンリー・ルイスと同棲して、彼の死後は他へ再嫁した「多情な婦人」(95)だったからだと記している。ブロンテの生涯を網羅し、小説との關係性を論じており、研究書として大いに筆者の願望を果たしたものと考えられる。また、最終章をブロンテと一葉の關係性について充てている点も看過できない。一葉の小伝と日記を読むと、ふたりの間に著しい類似点があることに気づくとした上で、「これは誠に興味多いことで、若し佛者の言を以てするならば、一葉女史はブロンテ女史の後身といつても餘り不當であるまいと思はれる」(232)と述べている。そして、一葉がシャーロットのように40歳まで生き、長年の片恋を小説にしたためていたならば、「明治の小説界に一大奇品を遺したに相違なからうが、天が、一葉女史に年を假さなかつたのは遺憾の極である」(244)とも記している。

1923年に豊田實による *Wuthering Heights* の注釈版が、『嵐が丘』のその後の批評および研究において、大いに貢獻するものとなったことは言うまでもない。岩上氏は「これまで一部の研究者を除いては、おそらくほとんど読まれたことのなかったであろう『嵐が丘』を、注釈を頼りに原文で読める状況が生まれたことは非常に大きな意味がある」(22)と評価している。これまで『ジェイン・エア』に惹きつけられてきた人々の興味が『嵐が丘』へと

移りゆく契機となった可能性は否定できない。

3. 昭和時代

Wuthering Heights の注釈版出版から6年後の1929年、細江逸記による“The Dialect of the Brontës”が発表された。これは『英語青年』の第60巻8号から12号、第61巻2号、5号、8号、9号に連載されたもので、特に『嵐が丘』に出てくる方言を分析したものである。著者は、序言において、自分はヨークシャー方言を話すわけではなく、旅行者として訪問したことがあるだけであると前置きしている。第1回は「序言」、第2回は「Haworth dialect の位置」、第3回から第9回は「発音」に充てられている。自身の体験が反映されていると理を述べているが、その分析は発音記号を用いた詳細に渡るものであり、難読である『嵐が丘』のジョゼフのセリフも引用している。例えば、第8回では、[ɔu] という発音は、標準英語では [ou] や [ɔ:] と響く場合に聞かれることが多いが、普通の綴り方において“o”または“ou”である場合に、ヨークシャー方言では特に“ou”や“ow”と書いてこの音を示すことが多いと述べ、例として、“T’maister’s down i’ t’ fowld.” (9) という『嵐が丘』のジョゼフの発言を引用している (22)。

以上、ブロンテ姉妹が明治期から昭和初期にかけていかに日本に受け入れられてきたかを概観し、傾向を考察した。イギリスでの批評史を踏襲したかたちで『ジェイン・エア』の高評価から始まったブロンテ姉妹への関心は、次第に姉妹の伝記的事実へと波及していった。明治32年においては、ブロンテ姉妹と日本の文壇とを結びつける言及が見られるようになる。今回の調査は限られた文献に基づいたものであり、日本文学との関係性については、今後も研究を続ける余地が多分にあるが、現段階では、ブロンテ姉妹の小説の中でもとりわけ注目を浴びてきた『ジェイン・エア』に関する批評がその一連の流れの源にあることは指摘できる。今回、『嵐が丘』その他の小説に関しては同程度の言及を目にすることはかなわなかった。それだけに、細江

氏によるヨークシャー方言に関する分析は、その後の新たな批評の礎を築いたかのようにみえて、ひときわ目を引くものである。

注

- ¹ 今回の調査は、岩上はるこ氏の論文に基づき、本学図書館所蔵のブロンテ姉妹受容に関する当時の文献を抽出し、さらに『文藝時評大系』の検索結果も加えたものである。
- ² 本論における文献からの引用については、可能な限り当時の旧字体を残した。ただし、変換不可なものに限っては、新字体に置き換えている。

引用文献

- Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Phoenix, 2001. Print.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Ed. Michael Mason. London: Penguin, 2003. Print.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. Ed. Pauline Nestor. London: Penguin, 2003. Print.
- Chorley, H. F. "Athenaeum." *Wuthering Heights*. Ed. Richard J. Dunn. London: Norton, 2003. 281–82. Print.
- Dry, Florence Swinton. *Brontë Sources I: The Sources of Wuthering Heights*. Cambridge: Heffer, 1937. Print.
- Gaskell, Elizabeth Cleghorn. *The Life of Charlotte Brontë*. 1857. Vol. 1. 2 vols. Cambridge: Cambridge UP, 2010. Print.
- Whone, Clifford. "Where the Brontës Borrowed Books." *Brontë Society Transactions* 11.5(1950): 344–58. Print.
- 青山霞邨(1913).『英國の青鞥女 ブロンテ女史』, 敬文館.
- 「一葉全集を読む(微笑生)」(1899).『世界之日本』, 3, 13–14.
- 岩上はる子(2008).『嵐が丘』の受容—明治期から大正・昭和初期』『滋賀大学教育学部紀要』58, 15–23.
- 佐藤善也(1982).「女學雜誌」日本近代文学館編『複刻日本の雑誌 解説』, 講談社, 74–77.
- 「雑録」(1896).『國民之友』, 18(277), 23–24.
- 「雑録」(1896).『國民之友』, 18(278), 31–33.
- 「雑録」(1896).『帝國文學』, 2(7), 86–91.
- シャーロット・ブロンテ著, 水谷不倒訳(1896).「理想佳人」『文藝俱樂部』, 2(8, 11, 12, 14).
- 「社説」(1888).『女學雜誌』, 108, 1–7.
- 「時文評論」(1892).『早稲田文學』, 26, 1–9.
- 「西洋小説百種」(1890).『國民之友』, 7(91), 38–39.
- 「叢談」(1892).『少年文庫』, 7(5), 346–48.
- 「叢話」(1886)『女學雜誌』, 32, 24–25.
- 豊田 實(1923). *Wuthering Heights*. 研究社.
- 細江逸記(1929). "The Dialect of the Brontës."『英語青年』60(8–12), 61(2, 5, 8–9).

キーワード

ブロンテ姉妹、シャーロット・ブロンテ、ジェイン・エア、嵐が丘、受容